Osaka Shoin Women's University Repository

葵祭

二回生
岸田知子

京都は薄曇りで霧雨のようなものに煙つていた。電車は七条辺から、左手に賀茂川を望み、右手の木々に沿つてまつすぐに進む。三条の駅に降り立つと澄んだ冷たい空気が私のまわりにあつた。

御所に着くとまだ人気もなく細かい雨が快かつた。徐々に見物の人もふえ、パンフレツトを売る人の姿も見えた。カメラを持つたミニスカートの外国女性がお祭りにある種の華やかさを加え、肌の色も違う異国のお祭りを、この人達がどう感じるのかおもしろく思つた。

十時を過ぎた頃、行列は私達の前に姿を現わした。身分の低い仕丁達なのだろう、簡単な白い着物に烏帽子といういでたちの若者達や白袴の姿がすがすがしい印象を与えた。彼らより身分の高いらしい人達は、ただ、重苦しく色のついた着物で、昔はりつぱだつた事を偲ばせるだけであつた。その頃は染色の技術も発達していなくて、庶民は白や簡単な染めのものが多く、身分の高い人達が美々しく着飾つて行くのを見上げていたのだろう。

行列は更に進み牛車が藤に飾られてやつてきた。牛車の人々は簾を通して外を眺め、又外からはどんな高貴な人が乗つているのかと、牛車を眺め、又牛車同士が優雅にきしみながらすれ違う当時の様子等が思い浮かぶようであつた。更に風流傘や女の人の列が華やかさを増し、斎王の御輿の前後の童女のおかつぱの姿がみやびやかなかわいらしさで、仕丁達の白い着物と共に印象深かつた。

斎王の御輿は想像していたよりも簡素で、簾を上げて前へ進む。斎王代は毎年私達と同じ年代の人が選ばれるそうだ。十二単を着て輿で行く彼女が今日のヒロインである。輿はしずしずと私達の前を通り過ぎて行つた。人々はこのお祭りで五穀豊穣を祈り、国家安泰を思い、この儀式が無事行なわれる事を願つたのであろう。それを思うと、遠い平安からの伝統の重みと人々の気迫というものまでがせまつてくるようであつた。

私達は同じ頭、同じ体で、ゴーゴーを踊り源氏物語を読み、何の矛盾もなくそれらを受け入れ感じとる事がある。表現形こそ変わつていても、昔から続いているもの（これを伝統と言つてよいかどうかは私にはわからないが）特にそれが個人に内在化し常に新鮮さを失わない限り、人間というものはいつまでも変わらないものだろうと感じた。そして古い都京都の印象と愛着を益々深めながら帰途についた。